

天竜山石窟

鄧仁有

天竜山は太原市から南へ約36キロ、海拔1,700mの呂梁山脈の支脈にあります。

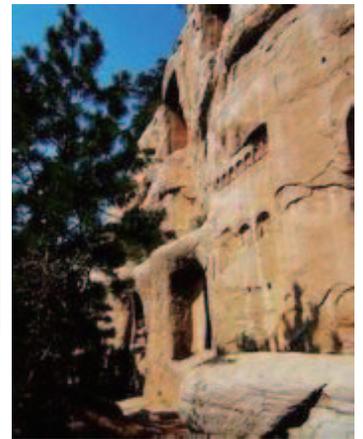
天竜山石窟の数はそれほど多くないですが、南北朝時代の東魏、北齊、隋、および唐と五代の五つの時代のものが含まれていて、異なる時代の石窟芸術を表しています。

天竜山石窟は東魏(534～550)の時代から開削し始めました。東魏の実力者、高歡は晋陽(現在の太原)を「別都」つまり第二の都にしました。政権を握っている16年間に高歡が天竜山に「大丞相府」を建てたほかに、避暑宮と石窟も作りしました。高歡の死後、その息子の高洋が東魏の権力を奪い取って、自らが皇帝になり、国号を齊と改めました。歴史上「北齊」と呼ばれました。その時にまた石窟を開削しました。

隋の時代に隋の文帝(581年～604年在位)がその息子を晋王に封じ晋陽を守りました。その時にも天竜山に石窟が開削されました。617年に李淵が太原から兵を挙げ唐王朝が建てられました。この時代に天竜山にさらに多くの石窟が開削されました。唐末から五代にかけてもまた石窟が開削され、このようにして天竜山には五つの時代の石窟が開削されたのです。



上掲左右写真は中国サイト、百度百科より



■主な石窟

天竜山は東西二つの峰にわかれていて、東には12、西には13の石窟が開削されました。これらの石窟は大同の雲崗石窟や洛陽の龍門石窟ほど規模は大きくはありませんが、中国の重要文化財になっています。

東魏時代の石窟は東峰に第2、3窟が開削されました。北齊時代には東峰に第1窟、西峰に第10窟、16窟が開削されました。これらの石窟の造形と技法を見ると、東魏と北齊時代の石刻芸術と建築の素晴らしさがわかります。

第8窟は隋の文帝が即位する前後に作られたと言われています。ここにある仏像は衣服が薄くてしなやかに全身を纏い、服の模様も細かく波打つような感じがします。また顔は無口で厳しく、冷たい印象を人々に与えます。

この天竜山には唐代の18の石窟があります。

ご存知のように唐の時代は中国史上とても盛んな時代で、優れている石窟も多かったのです。

北齊や隋の時代の石窟と唐の時代の石窟を比べてみましょう。北齊や隋の時代の仏像はインドからの影響が強く、例えば、眉が弧状になっていて、鼻筋は高く、長く、目は大きく、唇は厚いです。胸はあまり豊満ではないです。

しかし、唐の時代になると漢民族の特色も取り入れられ、この時期の彫像がより一層すばらしくなってきました。顔つきが豊満で、眉が細長く、また目が下を向いて、耳が大きく垂れ下がっています。胸も北齊時代よりも豊満になってきました。全体に写実的になり、立体感のある豊満な肉体描写が特徴です。この表情を見ると何となく落ち着いた優しい感覚を人々与えるでしょう。

■天龍石窟と日本の学者

1018年(大正7年)に関野貞(せきの ただし)が天龍山石窟を踏査し、1921年にその調査報



龍山石窟を代表する第九窟(唐代)の十一面観音像(山西省旅游局編「山西游」)

告を『国華』に発表しました。

1920年に常磐大定(ときわ だいじょう)が、22年に田中俊逸(たなか しゅんいつ)が探査を行い、天龍山石窟調査報告を著し、小野玄妙が天龍山石窟造像攷を著しました。しかし、これらの報告や写真の発表が天龍山に大きな盗難をもたらしたのです。

■石彫の行方

天龍山石窟には人為的な破壊で価値のあるものは殆どなくなっていました。特に、

1923年に中国は北洋政府の支配下において、文化財が大事にされなかったため、天龍山内の聖壽寺の僧侶が外国の骨董商と結託して、多くの仏像、その他の彫刻がアメリカや日本などへ流出してしまいました。

現在日本に於いては、京都の岡崎にある藤井齊成会有鄰館に隋代の石造金剛力士立像が、東京国立博物館には石造如来倚像(頭部欠)があります。根津美術館にも天龍山の仏像が所蔵されています。